

ノートゲルト学事始め

—券面に描かれた絵画に見るドイツ国民の悲哀—

森 義信*

要 約

1914年、第一次世界大戦の開戦と同時にドイツの諸都市や地方公共団体は、小額铸貨の流通不足を補う目的から緊急通貨の発行に踏み切った。それは法的根拠を欠くものではあったが、自助のための緊急措置であった。

1917年ころになると鉄製の硬貨が十分に出回るようになり、緊急紙幣発行の需要はなくなるが、1923年のハイパーインフレーションの時代まで、それは発行され続ける。発行主体は、それぞれの都市に馴染みの歴史的事象や物語、メルヘンを画題として、あるいは戦時の過酷な生活を券面に描き、彩色を施して蒐集家たちの興味を誘った。

本稿の前半は緊急通貨発行をカテゴリー別、時代順に記述し、後半は券面に描かれた絵画をとおして、ドイツの民衆がどのような思いで戦中・戦後の時期を過ごしていたのかを読み解いた。

はじめに

いわゆる「ノートゲルト」や超高額紙幣「パピアマルク」、あるいは「レンテンマルク」の実物を初めて見たのは、35年前、ベルリンはクーダムの街の骨董店においてであった。この時筆者は、国費留学生としてベルリン自由大学に学んでおり、当時勤めていた釧路工業高等専門学校の歴史の授業教材として使うこともあろうかとの思いで、ゼロが沢山並ぶドイツ中央銀行（ライヒスバンク）の紙幣一枚だけを買いもとめた。このハイパーインフレーション時代の紙幣は、その後、高専の学生に回覧したりコピーして配布したりするなど、教材としての役割を十二分に果たした。

2011年の春、ヤフーのオークションサイトで偶然、第一次世界大戦期の「ノートゲルト」を目にして、躊躇することなく入札し、競りを経て十数枚のカラフルな小額ノートゲルトを落札した。実物を手に取って仔細に見てみると、小紙片ながら多色刷りで鮮やかな彩色、細やかな作りであるが、手垢がついていない美品・完品が多い。つまり、あまり使われた形跡がないのが不思議といえれば不思議であった。

いまの時代、インターネットで検索すると、大体のことは解るものであるが、「ノートゲルト」については、専門的・学術的な言及は、日本はもとより、どこの国のサイトを検索してみても殆ど見当たらず、あるのは蒐集家のサイトや古銭ガイ

*大妻女子大学 社会情報学部

ドブックの類ばかりである。そうしたわけで、本稿では、ドイツのノートゲルトについて、それがまず、いかなるものなのか、そして、いつどのような状況下で発行され、いかなる機能を果たしたのかを調べてみることにした。

筆者は、しかし、ドイツの近・現代史や経済学、財政学に関しては門外漢であって、どのように調べて良いのか皆目分からず、まずは事典や概説書を読んで基礎知識を得ることから始めた。その後、いまして専門的な情報・知識を得るために、日本語で読めるドイツ近・現代史や経済史関係の専門書に進み、他方、蒐集家向けではあるが、ノートゲルトに関するドイツの書物を購入して読み始めた。そのなかにハンス・リヒャルト・シットニー著の『1917年から1923年までの戦時貨幣・ノートゲルトに描かれた伝承・メルヘン・歴史事象』という書物があった。この書物は、第一次世界大戦の開戦時から戦後にかけて、国民生活がきわめて困難な時代に発行された、ノートゲルトの券面に描かれた絵画を読み解くという、斬新なアプローチを見せてくれており、筆者の関心を大いに引きつけた。本稿の後半は、それゆえ、シットニーに導かれて、とくに興味深い券面の緊急通貨を紹介するとともに、そこに描かれた絵画から、当時のドイツの人々の心情や哀感を読み解いていく。準備不足もあるうえに紙幅の都合もあり、本稿で扱った券面は29枚に留まったことを予め断わっておく。

1. 小額コインの不足からノートゲルト（緊急通貨）の発行へ

第一次世界大戦（1914-1918年）の勃発とともに、戦時下のドイツではマルクの金兌換が停止¹⁾され、戦費は通常会計とは区別された特別会計として、すべて戦時公債という名の国債、つまり国家の借金で賄われた。国債の大量発行は通貨の増発を招くこととなり、これ以降のインフレーション持続の原因となる。

また、開戦と同時に、ドイツ政府は国内に流通させていた銅貨・ニッケル貨・銀貨—1プフェニ

ヒと2プフェニヒの銅貨、5プフェニヒと10プフェニヒのニッケル貨、2分の1マルクの銀貨—の回収を命じた。これらの金属が武器や砲弾等の軍需物資の生産や調達に必要とされたからである。しかるに、戦時公債の発行によって引き起こされたインフレーションが、鑄貨の金属としての価値を額面以上に高騰させたこともあって、多くの機関や個人が鑄貨を貯蔵・退蔵し始め、人々の財布の中に小銭が見出されなくなっていく。

鑄貨が退蔵されたもう一つの理由は、民衆の預金封鎖への恐怖心や戦時下の生活への備えにあった。銀行口座にある預金は、政府の臨時措置や敵軍の侵入によって、ある日突然に封鎖されてしまう恐れがある。現金で持っていれば封鎖を免れるし、いざという時には持ち運びも可能である。しかも戦時には、危殆に瀕した人々への施しや慈善の募金はもとより、小額貨幣は日常の消費生活に必要な不可欠とされたからである²⁾。

回収と退蔵もさることながら、鑄貨不足が引き起こされた真の原因は、政府およびドイツ中央銀行（以下ライヒスバンクと表記）が、小額貨幣の流通増加を図らなかったことにある。個々の商店における商取引や乗車料金の支払いなどは、高額紙幣だけでは完了せず、釣銭の不足は日常生活を営む人々に多くの困難を強いた。

開戦当時のライヒスバンクの緊急指令には「小額貨幣を意味もなく退蔵する者は、ローンや俸給の期日通りの支払いを妨げ、商業や交易を行き詰まらせ、究極のところ軍装や弾薬の製造に悪影響を及ぼし、前線を弱体化させ敵の勝利に貢献することになる。……（中略）小額貨幣の退蔵は国家叛逆罪なり」とある（Schittny, p. 7）。

かかる状況下で、都市や地方公共団体、企業は、法的根拠を欠いたまま、いち早く小額紙幣の発行に踏み切った。ドイツの市町村は共同体内で通用する自前の金券や証券を発行するようになり、企業もこれに追随した。この時代に発行された緊急貨幣³⁾のことを「ノートゲルト Notgeld」と呼び、戦時中に限っては「クリークスゲルト（戦時貨幣）Kriegsgeld」ともいわれた。当時のドイツでは、1マルク以下のお金ならライヒスバ

ンクではなく、様々な機関—銀行、地方公共団体＝市町村、民間企業、国有企業—が発行できるとする主張もあったようであり、そうした考え方自体はドイツ帝国が王国や公国からなる連邦制国家の所為で生じたとも推測できる⁴⁾。ともあれ、このノートゲルトは法定貨幣ではなく、あくまでも支払いのために便宜的に発行・使用されたものであった。主として紙幣の形で発行された⁵⁾「ノートゲルト」が大量に出回ると、小額铸貨の不足はやがて改善されたという。

2. 戦時下の時代状況とノートゲルトの発行

ノートゲルト（緊急通貨）の発行状況について、年次を追っていま少し詳しく述べてみたい。C. L. コッフインクやH. R. シットニーによれば、1914年から1923年の間に発行されたノートゲルトは、三つの異なるカテゴリーに分類されうるといふ（Coffing, p. 4; Schittny, p. 8）。これに従って順次見ていくことにする。

2.1 小額铸貨の不足を補ったノートゲルト

1914年7月25日、セルビアがオーストリアの最後通牒を拒否すると、ドイツ国内はオーストリア支持のデモ隊で埋まり、国内世論は一挙に参戦に傾く。8月1日の総動員令発布以降、対ロシア、対フランス宣戦布告を経て、8月4日にドイツ軍はベルギーに侵攻する。大戦突入前のドイツは、食糧の3分の1を外国からの輸入に頼り、しかも国内に十分な備蓄もないまま、「電撃戦」に突入していった。開戦当初は、人々が買い溜めに殺到したため、食糧品の価格は一気にはねあがったが、この高騰は一時的なもので、まもなく沈静化した（三宅、1970、p. 108 注3）。しかし、1914年9月上旬のマルヌの戦いの結果、軍部の短期決戦の目論見は外れ、戦局は膠着状態に陥る。スイス国境から英仏海峡まで長く伸びた西部戦線では、膨大な損耗を強いられる3年半に及ぶ塹壕戦に入った。備蓄の砲弾は開戦2カ月で使い果たしてしまい、戦争の長期化の様相が濃くなるにつれ

て「弾薬の危機」が叫ばれ、軍需産業への傾斜が一段と強化される。

大都市などではいち早く食糧や日用品が不足し、食品を中心に物価の高騰がみられた。こうなると、商店主は売り惜しみをし、消費者は買い溜めに走り、農村へ買い出しにも出かける。1914年10月末、小麦・ライ麦に最高価格が設定されるなど、食糧統制も始まった。法定価格通りに売る商店は極端に少なくなり、そうなるとかえって、あちこちに、なかば公然と闇市が立つようになる。11月初めのイギリスによる経済封鎖強化の宣言は、食糧価格の高騰に拍車をかけることとなった（三宅、1970、p. 110; 112f.）。同年末には節約スローガンが横行するなか、「肉なしデー」がもうけられ、代用食が勧められるなど、戦時下特有の耐乏生活が国民に強いられるようになった（木村、1997、p. 66）。

1915年1月になると、ベルリンではパンの配給制がしかれ、それは各地で順次実施されていった。パンの配給制が施行されたあと、馬鈴薯・肉などの殆どすべての食糧品、靴・衣料・石鹸などの生活物資全般の配給も行われるようになる。それにしても、配給だけで家族全員が食べていけるわけではないので、民衆は知恵を絞って自衛せざるをえない。多くの人々が高価な肉とバターの消費を減らす一方で、パンと馬鈴薯に依存する食生活を余儀なくされる。この年の秋から冬にかけて、ドイツ各地では食糧や平和を求める騒動やデモが頻発した（三宅、1970、p. 122f.; p. 129f.）。イギリス海軍によるドイツ封鎖作戦—ドイツ側はこれを「飢餓封鎖」と呼んで非難した—が功を奏したこともあって、一気に食糧事情が逼迫し、ドイツ農村部では、政府の指導ミスもあって大量の「豚殺し」⁶⁾（1915）が起きてしまった。

1916年に入ると、食糧価格の高騰にいつそうの拍車がかかり、5月には宰相に直属する戦時食糧庁が設立された。16年の野菜・穀物の収穫量は、労働力や生産手段の不足などの結果、異常に少なく、とくに馬鈴薯の収穫の減退が著しかった（三宅、1970、p. 135）。この年の暮れから翌年の初めにかけて、ドイツは「蕪の冬」と呼ばれる激烈

かつ悲惨な飢餓に見舞われ、推定80万人もの人々が飢え死にしたという⁷⁾。

ドイツ最初のノートゲルト（緊急通貨）が出現したのは、1914年7月31日で、発行主体は「ブレーメン市ブラオハオス公共企業体 Bürgerliches Brauhaus GmbH」で、額面が1マルク、2マルク、2.5マルク紙幣であった。これ以降、1914年だけで、452箇所から5,500種の緊急通貨が発行された。

1914年から1916年までの初期のノートゲルトは、有効期限が短く券面の作りも単色刷りの簡素なものが多い。券面には、発行地域内でのみ有効であり、回収期日が来たら多くの場合「シュパールカッセ（貯蓄金庫）」でライヒスバンク発行の通貨に交換されると明記されてある。あるいは、新聞や広報で回収期日が告知されたならば、そこから1か月以内が交換の有効期間であると明記されている。回収・交換時の換金は、新しい別のノートゲルトへの交換か、後述するライヒスバンク発行の鉄製の硬貨や小額紙幣との交換であった。券面には、また、記番号はなく、発行責任者の自筆の署名がある。

この時期のノートゲルトは、小額の平時の銀貨や銅貨⁸⁾の不足を一掃すべき代替物として発行され、実際に利用・使用され流通した緊急通貨である。使用有効期限が短く設定されていたため、この紙幣を入手した者はできるだけ早く使ってしまうとするので、経済活動の活性化には繋がったようである。経済学上、この時期の緊急通貨は、近年注目され試行されてもいる「地域通貨」との関連で、興味深い研究対象となりうる。

2.2 絵入り彩色のノートゲルト

1916年から17年にかけて、軍需優先の統制経済や食糧配給制度のもとで国民生活は逼迫し、ストライキや食糧暴動が頻発する。1917年2月には、イギリス海軍による封鎖を解くために、いわゆる無制限潜水艦作戦が発動され、アメリカの対独参戦を招いてしまう。

戦争が長引き財政が逼迫するにつれて、戦時公債の発行だけでは間に合わなくなる。戦時税とし

て、付加税・財産増価税・増加利得税・石炭税・旅客貨物運送税といった直接税が施行され、煙草税・貨物運送状収入印紙および郵便・電信料金の値上げが行われ、ビールやシャンパン、ワインやミネラル水への新たな課税もなされた⁹⁾。

開戦3-4年目のドイツ民衆の日常生活がいかに深刻な状況にあったかを物語るデータが2つある。1つは、1913年を基準とした卸売物価指数で、1916年3月末に150程度、1918年11月には234に達している¹⁰⁾。また、下表は、大戦期ボンにおける食糧の小売価格とヤミ価格を開戦時と比較したものである。1917/18年冬季の小売価格は政府による統制を受けているため、1914年に比較して、牛肉が2.8倍、バターが2.62倍、チーズが1.94倍、ライ麦粉12.33倍、コーヒーは3.16倍に留まっている。もっとも小売商の店先にはあまり商品が並ばず、すぐに売り切れ、早目の店仕舞いということになったようである。闇市での売買が増大するようになると、金を持っている市民はそこで必要なものをほぼ確実に入手でき、貧富の差がそのまま生存の可否に繋がっていく事態となる。闇市での食糧価格を1914年のそれに比較して

表 大戦期ボンにおける食料の小売価格とヤミ価格の比較

食料品目	①1914 小売	②1917/ 18 小売	③1917/ 18 ヤミ	(③・①) ×100 (%)
牛肉（成牛）	1.00	2.80	4.75	475
豚肉	0.80	-	6.00	750
ラード	0.80	5.00	18.00	2250
燻製ベーコン	0.70	2.75	15.50	2214
バター	1.30	3.40	14.00	1077
オランダチーズ	0.90	1.75	12.00	1333
菜種油（1リットル当）	0.60	5.00	21.50	3583
ライ麦粉	0.15	1.85	4.00	2667
小麦粉	0.20	-	4.00	2000
エンドウ豆	0.30	-	4.70	1567
リンゴ（1個当）	0.15	0.70	4.5	3000
コーヒー	1.20	3.80	23.50	1958
ヘーゼルナッツ	0.50	4.10	5.70	814

註：価格は断りのない限り1ポンド当たりの価格。

（Roerkohl, S. 354-357. より藤原が作成したものを転用）

みると、牛肉が4.75倍、豚肉が7.5倍、バターが10.77倍、チーズが13.33倍、小麦が20倍、ライ麦26.77倍、コーヒーは19.58倍である（藤原、p. 50 f. 表3）。統制価格とヤミ価格の間には、2倍から6倍台までのバラツキはあるものの、政府による価格統制が十分に機能していなかった様子が読み取れる。

18年1月にはアメリカ大統領ウィルソンが14カ条の和平提案を示す。この年の3月、西部大攻勢が失敗に終わると、議会内に多数派が形成されて和平を探る動きも出てくる。同年の夏以降、「前線でも銃後でもドイツの戦争体制は解体・崩壊の過程に入った」（三宅、2005、p. 184）。

小額紙貨について言えば、1916年以降、従来の国家発行の金属貨幣は、鉄製の貨幣に順次置き換えられ始め、1917年になると、銀行団が鉄製の小額硬貨を大量に製造し流通させたので、小額の緊急紙幣を発行する必要性は薄らいだ。にも拘らず、地方によっては小額コインが再び不足する事態も生まれたため、政府は都市や地方公共団体に引き続きノートゲルトの発行を許可した。許可の条件は、発行予定総額をライヒスバンクに預け金として差し出せば、小額の紙幣（ノートゲルト）を発行できるというものであった（Elster, p. 200）。これがライヒスバンクによる額面保証のついたノートゲルトであるが、実際は預け金の何倍もの発行がなされたようである。この結果、実需分以外にも、蒐集家向けに手の込んだ絵柄の、彩色の美しい紙幣が作成され、蒐集家の集うマーケットに持ち込まれて良い値段で取引されたという。蒐集家はライヒスバンク発行の紙幣でこれを購入したので、都市や地方公共団体は、市場で相当額の雑収入を得ることになった。なお、1マルク以下の「クラインゲルト 小額紙幣」は、1915年から1922年までの間に、3,658箇所から36,000種類発行されている。

2.3 額面の大きいグロースゲルトシャイン

1918年11月にはキール軍港の兵士の反乱、シャイデマンによる共和国設立宣言とリープクネヒトによるドイツ社会主義共和国の創立宣言を経て、

ヴィルヘルム2世のオランダ亡命、中央党の政治家マティアス・エルツベルガーによる停戦条約への署名がなされ、翌1919年2月には「ヴァイマル連合」政府（1919-1933年）が成立し、6月にはヴェルサイユ条約の調印に至った¹¹⁾。

「ドイツでは、戦争の費用を賄うために、1914年から1918年にかけて戦時公債を起債、通貨流通量は10倍に跳ね上がり、マルクに対する金による保証は放棄された。その結果、マルクの国際相場は半分に下落した。休戦が決定した後は、かつての戦時経済は平和産業へと転換を迫られ、そのために必要不可欠な投資は起債によって賄われねばならず、このことがなお一層の通貨流通量の増大をまねいた」（イエーガー、p. 189）。

戦時公債の発行により戦時中から始まっていた通貨インフレーションが、戦後も緩慢に進行していた。1918年からインフレーション昂進の兆しが見え始め、1919年以降、年率6%の経済成長率が続いた結果、株式市況にも活況が戻り始めた。ノートゲルトの発行は、財政面からも流通経済の面からも、必要性が少なくなったにもかかわらず、1921年まで多くの紙幣が発行され続けた。いわゆる「グロースゲルト 高額紙幣」と呼ばれた額面1マルクから100マルク紙幣の印刷が行われ、これも蒐集家のマーケットに持ち込まれた。1918年-1921年の間に「グロースゲルト」は、579箇所、およそ5,000種類ほど発行されている。この時期のノートゲルトは非常に多彩であり、すぐに蒐集家の購入目標となったようである（Coffing, p. 4-7）。K. エルスターによれば、1919年初頭におけるノートゲルトの流通量は推計1億1,000万マルクで、正規の流通貨幣総額250億マルクの0.44%に過ぎず、財政学上はとるに足りないものであった（p. 201）うえ、蒐集家の手元に置かれてあまり流通もしなかったようである。

ところで蒐集家がノートゲルトを買い集めた理由は、値上がりが期待できたからでもある。この背景には進行中のインフレーションのなか、何もかもが目まぐるしく値上がりを受け、株式市場も活況を呈していたとあれば、日々価値を失い紙くずになってしまうかもしれないライヒスバンクの

紙幣を持っているより、ノートゲルトに代えておくことに魅力を感じていたとも推測できる¹²⁾。この時期のノートゲルトはシリーズもの、高名な絵描きの筆になるもの、歴史事象や故事に画題をもとめたものなど多岐にわたり、さながら「緊急通貨文化」が花開いたとさえいえる。ノートゲルトの券面に描かれた絵画は、戦時・敗戦・戦後の混乱期を通して、あらゆる危機と重い負担に耐えてきたドイツ人が、片時もユーモアを失うことがなかったことを鮮やかに示している。



図版1 物価上昇指数の国際比較

図版1解説：1921年初頭、チューリンゲンのカーラ Kahla in Thüringen で発行された額面75プフェニヒの緊急紙幣には「ドイツの経済指数」と題して、1913年を100とした1920年下期の物価上昇指数の国際比較が棒グラフで示されている。合衆国・日本・豪州あたりは200前後、フランスが500、イタリアが700に迫る数値にたいして、ドイツは断トツの1300。物価上昇に対する市民の強い不満と関心が示されている (Schittny, p. 145)。

1921年賠償総額は1,320億金マルクと決定され、政府は支払い不能として総辞職し、後継首相ヴィルトは賠償支払いに応じつつ条約の修正を求めるが、事は首尾よく運ばない。1922年は、ヴァイマル共和国史上最多のストライキ、ロックアウトがなされた年であった。左右の勢力が拮抗する政治情勢と政局の中、労働者の急進化を避けるためあって、経営サイドは賃上げを認め、これを商品価格に転嫁させる方法をとった。このことも

インフレーションの進行の一原因とされる。ともあれ、この年の後半には、外国為替市場におけるマルクの急落がみられた¹³⁾。当時のドイツ国内では、大きな額面の紙幣が発行されている時期で、中央銀行券の信認が失われつつあり、またその流通が滞りなく行われ難い状況下、これに代わる交換手段が、地方単位で模索された。こうして市町村によって発行された地域限定の紙幣が再び相応かつ重要な役割を果たすことになった¹⁴⁾。

ヴァイマル期のハイパーインフレーションとその終息に至る過程、およびその時期の緊急通貨に関しては、章を改めてさらに詳しく考察を加えたい。

3. ヴァイマル期のハイパーインフレーションとレンテンマルク暫定紙幣の発行

ヴァイマル政府は、国土の縮小に伴う生産力の低下、巨額の賠償金問題の処理、船舶・鉄道車両・機械・石炭などの物資による実物賠償¹⁵⁾、さらにはルール占領問題の解決、戦争犠牲者の救済、戦時債務の利子支払い¹⁶⁾、ハイパーインフレーションからの脱却という困難な課題に直面することになる。それ以上に事態を深刻にさせたのは、敗戦を引きずる形で国内に蟠っていた「内なる敵」論や「背後からの一突き伝説」、政治文化に潜む野蛮で軍事的な風潮であったと言われる (三宅、2005, p. 186f.)。

3.1 ハイパーインフレーションとノートゲルトの発行

1918年の5～6月頃より、ヨーロッパ全域ではスペイン風邪が流行し、次いで1919年春から秋にかけて、大流行して猛威をふるった。諸国民の栄養低下と体力の衰えが原因であったことは言うまでもないが、インフルエンザによる死者の数は第一次世界大戦による戦死者と合わせて、ヨーロッパに甚大な人的損傷をもたらした。ドイツ国内の物資の欠乏は異常なまでのインフレーションをもたらし、卸売物価指数は、1913年を100として終

戦時234、1919年3月273、1920年3月1,710と上昇し、1921年の末頃にさらに急騰、1922年3月には5,430に達した（ハラ、p.176）。国内の物価上昇を為替レートが如実に反映することとなり、大戦前に1\$ = 4.2^{マルク}であったものが、1919年7月に1\$ = 14^{マルク}、1920年1月には1\$ = 65^{マルク}、1922年1月には1\$ = 192^{マルク}となり、マルク安と国内のインフレーションはコントロールできなくなり始めた¹⁷⁾。

ライヒスバンクの紙幣の印刷がインフレーションに追い付かず、州や地方自治体、企業に対して、認可申請と保証金納付を条件に緊急通貨の発行を許す法律が成立をみた。もっともこの法律は1914年以降の戦時下ですでに既成事実と化した事柄の追認にすぎなかった。公認の緊急通貨は、金種に関係なく最大500マルク、場合によっては1,000マルクまで発行が許可されていて一上限は定期的に引き上げられた一、2、3カ月でライヒスバンクから償還を受けられた（ファーガソン、p.156）。

1922年7月、緊急通貨の発行と償還に関する法律が出され、全ての緊急通貨は発行者により償還され、将来はもはや発行を許されないことが規定された。但し「流通の必要性」がある場合に限り新規の発行も認められるという抜け穴もあった¹⁸⁾。1922年、100マルクから1,000マルクの「グロースゲルト」は、800箇所からおよそ4,000種類が発行されている。ライヒスバンクの保証がついた緊急通貨は乱発されるが、それでもインフレの速度には追い付かず、現金不足は一向に解消しない。給与を支払えない企業家の中には、労働者への支払いのために、紙幣に加え地元商店街でしか使用できないクーポンを渡すものまで出てくる。企業はこのクーポンの短期間での換金を約束していた。今でいう地域通貨のようなものであるが、これもインフレーションを加速する要因となっていく（ファーガソン、p.117f.）。自治体も独自の緊急紙幣の発行を始める。公務員や一般の勤め人への賃金の支払いが少しでも遅れると、日々通貨の価値が下がっているなか、実質的な給与の目減りにつながってしまうからであった（ファーガソ

ン、p.147）。

1923年、ドイツの賠償支払い一部不履行を理由に、フランスがルール重工業地帯の占領を行うと、ドイツは進駐軍への協力を拒む「消極的抵抗策」で対抗した。当地の国鉄労働者や重工業労働者への給与の支払い、自治体への援助金など、この抵抗策を支える巨額費用を、政府は紙幣の増刷で賄った。しかし、この巨額紙幣の発行は財政的裏付けのないものであったため、記録的なインフレーションが進行することとなった¹⁹⁾。このインフレーションは破局的様相を呈し、マルクの価値は急激に下がり、8月には最初の1億マルク札が導入され、これを皮切りに億単位の高額紙幣が次々と発行された。それでもライヒスバンクは通貨の需要に見合った供給ができず、ノートゲルトが再び発行された。

政府はノートゲルトの発行によりインフレーションが一段と進行しないよう、発行主に発行予定総額を預け金として差し出すように命じ、違反者を罰するとした（Elster, p.201）。1923年12月末時点におけるノートゲルト流通総額は、763京2,369兆マルクであり、正規のライヒスマルクの流通紙幣総額4垓9,700京の1.54%であった（Elster, p.202）。

他方、多くの私企業はライヒスバンクに預け金もせず、したがってなんの保証も受けずに、財源の担保もない違法な発行を繰り返した（ファーガソン、p.215）。この総額は上記エルスターの推計では1,200京、流通紙幣総額の2.4%を占めた²⁰⁾。1923年には6,000箇所、70,000種類の緊急紙幣が出されているが、このうち1923-24年にかけてライヒスバンク公認の償還を保証されたノートゲルトは、562箇所、36,600種類にすぎない²¹⁾。

3.2 レンテンマルク暫定紙幣の発行と

ハイパーインフレーションの終息

最終的には戦前と比較して1兆倍にも及ぶインフレーションが発生し、1923年11月に「レンテンマルク」という暫定通貨が発行され、ここに1兆分の1のデノミネーションが行われた。レンテンマルクの発行数量を極度に制限することによっ

て、紙幣に価値を賦与したので、やがて賠償問題の解決とともに予算の均衡が確実となり、ライヒスマルクによる金本位制に復することができた（プフライデラー、p. 219-231；木村靖二、p. 279-299；村瀬興雄、P. 273-275）。11月の時点では、超高額紙幣「紙マルク Papier Mark」と等価値のものとして広く使用されていた、緊急通貨の発行停止と切り替えも緊急の課題となり、総額で10億金マルクにも及ぶと推定された公認および違法緊急通貨の切り替えのための措置が講じられた（ファーガソン、p. 253-56）という。

この過程で戦勝国側は、マルク安の影響を回避せんとして、ドイツ国家そのものに負わせていた戦争賠償金1,320億金マルク²²⁾について、米ドル、英ポンド、仏フラン、伊リラ建てでの支払いを求めた（Elster, p. 121）。他方、ヴァイマル政府は、1922年に6,675億マルクにのぼる国債などの負債を抱えていたが、これは23年にはわずか27億マルクに減少していた。こうして政府は負債の償還を顧慮することなく、紙幣の整理に専念できた。また負債を抱えていた農民や商工業者などの階層も、このインフレーションによって借財を帳消しにし、インフレーションを利用して巨利を稼ぎ出した闇商人の一群も存在した。他方、賃金で生活していた労働者・ホワイトカラー層・利子生活者、預貯金で財産を蓄えていた中産階級は大打撃を受けた。ドイツ国家が天文学的数字とされる戦争賠償にも戦時公債にもけりをつけられたのは、この「中産階級の貧困化」を代償としてのことであった（イエーガー、p. 195）。

4. ノートゲルトに描かれた絵画を読み解く

本稿の後段では、ノートゲルトの券面に描かれた絵画や記載されている文言を通して、1914年から1923年までのドイツ社会の実情や時代相を探り、ドイツ民衆の心情、心性を読み解いていきたい。



図版 2-3 ドイツの貨幣制度の推移

図版 2 解説：1921年11月、ハノーファーのメレ Melle/Else in Hannover 発行の額面25プフェニヒの小額紙幣、券面上段には「ドイツの貨幣単位」とあり、中央の文面は「かつてドイツ帝国ではどこのラント [邦] も独自の貨幣制度を有していた。いまではボーデン湖からバルト海沿岸まで、法に則った貨幣単位が支配的である。それでも、メレもベルリンもそのほかどこの都市も、独自の都市貨幣を有している」とあり、下段には「この緊急紙幣は流通のために市の貯蓄金庫と取りきめられた。紙幣換金・回収についての正式な公告後1カ月で有効性を失う。メレ、1921年11月」(Schittny, p. 147)

図版 3 解説：メレの10プフェニヒ小額紙幣。「ドイツの貨幣は高い価値があって明るい輝きを放っていたグロッシェン²³⁾銀貨に始まる。この系統が途絶えると、ニッケル貨が取って代わった。ニッケル貨はさらに鉄製の貨幣10枚という塊に席を譲った。それから鉄の硬貨は散々小突きまわされてボロになり、紙で作られた代替品が現れたという次第」下段の文面は、図版 2 と同文である

(Schittny, p. 146)。



図版 4-5 開戦当時の緊急紙幣

図版 4 解説：1914年 8 月、ハノーファーのゲエステミュンデ（ブレーマーハフェン）Geestemünde (Bremerhaven) in Hannover 発行の 1、2、3 マルク紙幣（ゲートシャイン）。それぞれの券面には「本紙幣持参者に当市の金庫より [ライヒスバンク発行の額面の] マルクを支払う」とあり、下段に手書きの署名がある。肌色の紙に単色刷りで、鉄道切符のような券面である。

図版 5 解説：1915年 1 月 16 日、シュレースヴィヒ・ホルシュタインのアイデルシュテット Eidelstedt in Schleswig-Holstein 発行の額面 1 マルクのゲートシャインである。上段に「戦争支援 アイデルシュテット」とあり、その下に「額面 1 マルク」。「アイデルシュテットの商店で購入される品物についてのみ有効。このゲートシャインは、裏面に商品販売者のスタンプがある場合、次の月の 10 日から 14 日の間にゲマインデカッセ（金庫）で現金化される。ゲマインデ金庫の日付とスタンプの捺されたシャインのみ有効」とある。券面の左下に「1915年 1 月 18 日」、右下に「ゲマインデカッセ アイデルシュテット」の楕円形のゴム印が捺されている。浅緑色の地の紙に単色

刷りである。



図版 6-7 ノートゲルトが発行された経緯

図版 6-7 解説：1921年、バイエルンのキッチンゲン Kitzingen in Bayern 発行の 50 プフェニヒ緊急紙幣は、当市がノートゲルト発行に至る経緯をウィットとユーモアをまじえて 6 コマの影絵を描いている (Rother, R. 作画)。1 枚目 (図版 6) は「小銭が出回らなくなることがあって、守銭奴の夫婦が首を傾げている」、2 枚目 (掲示せず) は「役人が市の財布の底にも、1 プフェニヒも見つけられない」と嘆く図、その後の 3 枚 (掲示せず) では、市の賢人・長老ともいべき市参事会員が集められて小銭の払底について検討がなされ、何とかしなければということで衆議一決、かくして図版 7 にあるような影絵と相成る。50 プフェニヒ緊急紙幣の外枠には「その決議というのは、[驢馬に跨る] 1 人の賢人がノートゲルトを排便させるというものであった」とある。本来な

ら「印刷・発行」とすべきところを「排便」としているのは、ドイツ人には馴染みの「金貨を放る驢馬」のメルヘンを思い起こさせつつ、金貨ならぬノートゲルトを「排便」させる仕儀となったことを、伝えるため (Schittny, p. 10-11)。黒と緑の二色刷り。



図版 8 非常時の我慢は戦時の定め

図版 8 解説：1917年 7 月発行、ヴェストファーレンのビーレフェルト Bielefeld in Westfalen の 10 プフェニヒ緊急紙幣、裏面には人間の表情をして涙を流している蕪の絵があり、葉の部分に「1916年-17年冬のビーレフェルトにおける消費量は30,000ツェントナー [1ツェントナーは500kg]」とある。左側面に「非常時の我慢は戦時の定め」とあり、左上の紙幣の記番号から下に向けて「10プフェニヒ、戦地為替」、菱形の朱印の外側に「1917年ビーレフェルト市」とあり、中のSSKBは「ビーレフェルト都市金庫」の略字、券面の外側の枠の中には、右に「1917年戦時緊急紙幣」、下の枠内に「市長シュターペンホルスト博士」、右から上の枠へ「食糧委員会・委員の名前某々」とある。

なお、掲示していないが、本券のおもて面には「この紙片は戦時緊急紙幣であり、1920年上四半期まで有効、本券は当市のどこの銀行でも大量に受け入れられる」「ビーレフェルトの貯蓄金庫は本券持参者に、10プフェニヒを支払う、市参事会、1917年 7 月」の文字が見出される。



図版 9-10 陽はまた昇る

図版 9-10 解説：1921年 6 月 27 日、ザクセン＝アンハルトのフローゼ Frose in Anhalt 発行の 6 枚シリーズの通称「クイズシャイン」、50プフェニヒと 75プフェニヒ紙幣。券面には絵や謎文字が並んでいて、この緊急紙幣を手にした人々が、トンチをきかせて解明する仕組みになっている (Dockhorn, W. 描画)。それぞれの解答は、1枚目：「危機は重大、負担は重い / 1 から 6 までのクイズの解答は、当該紙幣の記番号を添え書きして、当市の首長宛てに送られるべし」、2枚目：「だれがこの緊急紙幣を我々から受け取るのか」、3枚目 (図版 9) 「だれも助けてくれない、我々の自助努力しかない」、4枚目：「涙は止めるべし」、5枚目：「一つの国民、一つの精神、一つの言葉、一つの目標」、6枚目 (図版 10)：「さすれば陽はまた昇る」となっている (Schittny, p. 59f.)。

ここでも緊急紙幣の発行が、戦勝国による法外な要求に起因していることを暗示しつつ、ドイツ国民は自助努力、涙を止めて一致団結して耐えなければならない、必ずや再起はかなうとするメッセージが読み取れる (Schittny, p. 60-61)。

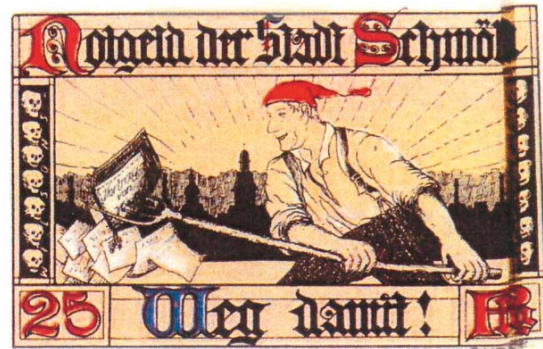


図版11 戦勝国の過酷な要求がドイツの危機の主因

図版11解説：1920年8月6日、フォアポンメルンのドラムブルク管区 Kreis Dramburg in Pommern (現ポーランド Drawsko Pomorskie) 発行の50プフェニヒ緊急紙幣。券面には「ドラムブルク地方にはご存知のように<シュライフミューレ [厳格なしつけで有名な学校]>と呼ばれる機関がある。我らの危機をまだ理解していない者はここで理解を深められる」

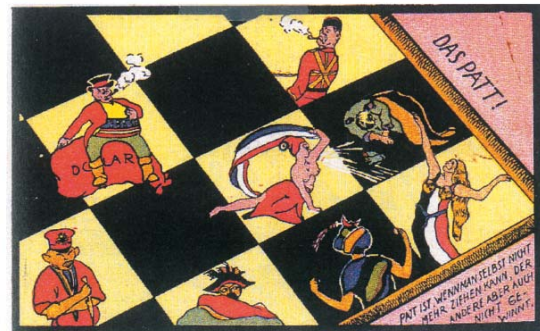
券面右手に描かれている人物は、戦勝国のアメリカ人・イギリス人・フランス人・イタリア人で、賠償金の支払いを待っている。水車のこちら側で石臼を回しているのは、ドイツ人ミヒエル [愚直で政治的には無知なドイツ小市民の典型を指す] その人であり、石臼の回転によって、緊急紙幣が大量に刷られている。ドイツの危機は、戦勝国による巨額な賠償金支払い要求に起因していることを、この絵は物語っている。

当管区は24万マルクの賠償を分担すべく、この50プフェニヒ紙幣を印刷・発行した。額面50プフェニヒであったが、2枚1組の緊急紙幣を、蒐集家には100マルクで売却できたので、当管区は賠償分担額を支払った後、なお相当額を金庫に収めることができたという (Schittny, p. 55)。



図版12 ヴェルサイユ条約を糾弾する

図版12解説：1921年頃、ザクセンのシュメルン Schmölln in Sachsen 発行の25プフェニヒノートゲルト。第一次世界大戦後、ドイツのあらゆる階層の人々はヴェルサイユ条約の約款に対して大きな憤りを抱いた。当市もまた、民衆の心情に正しく応えるべくシャイン (緊急紙幣) を発行している。図中ではドイツ人ミヒエルが堆肥フォークで、屈辱の条約を堆肥の山に放りあげている。左右縦の欄に7つずつ並んでいる髑髏は、アメリカ大統領ウィルソンの提唱した14カ条が死文と化していることを象徴的に示している (Schittny, p. 152)。



図版13 戦勝国はアメリカ

図版13解説：1921年10月1日、ザクセンのハルバーシュタット近郊シュトレベック Ströbeck bei Halberstadt in Sachsen 発行の2分の1マルク緊急紙幣。表面には額面、発行日と失効日 (1922年3月31日)、ゲマインデの首長の署名があり、裏面がチェスの盤面の絵である。一方に打つ手がなく、他方も勝てないという手詰まりの状

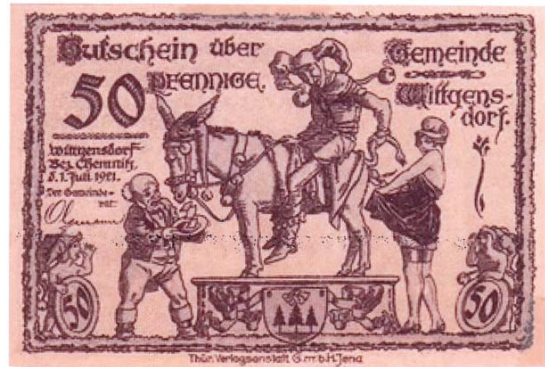
況 (das Patt) を描いている。ドイツは戦争に負けたが、連合国側の勝利は支払った高い代償のゆえに真の勝利とは呼べない、ということを暗示したものであろう。なお、盤上の駒は第一次世界大戦の参加国をシンボル化したもので、ドイツの国旗を纏い腕を高々と上げた女性は、瀕死のゲルマニア [ドイツを擬人化した女性] をあらわし、フランスは地べたに横坐りして三色旗をかざすマリアンネ [かの自由の女戦士] として、イングランドはパイプを咥えたジョンブル、ロシアは抜き身のナイフをもって直立しているイヴァンとして描かれている。イヴァンの悲しげな表情は戦勝の喜びからは程遠い。アメリカのアンクル・サムは唯一勝利者然として描かれており、ドル紙幣で一杯の袋の上に腰をおろして葉巻を燻らせている (Schittny, p. 65)。1920年代初頭のドイツ人が己が国の置かれた国際政局をどのように受け止めていたかが、窺い知れる。



図版14 ユダヤ教徒とキリスト教徒の第一の義務

図版14解説：1921年5月25日、ヴェストファーレンのハンザ都市レムゴー Lemgo in Westfalen 発行の50プフェニヒノートゲルト。券面上部中央

に市の紋章、市の参事会員が布告を読みあげる図。「古のハンザ都市レムゴーの市参事会は本日、以下を命ずる。ノートゲルトが本日唯今、発行される。ユダヤ教徒とキリスト教徒の第一の義務は、当局に従うことである。汝らが市参事会を信頼すれば、敬虔にして賢明なる当局は、慈悲深く品位ある統治を通して、本市を守護する。沈黙することこそ常に礼節にかなっているということを [汝らは知りてあれ]」 (Schittny, P.9)。券裏面には記番号、中央に町の鳥瞰図、下段に市参事会員6名の自署がある。ハンザ都市レムゴーならではのことであろうが、ユダヤ教徒が真っ先に出てくるところに注目したい。



図版15 新札を吐き出す驢馬

図版15解説：1921年7月1日付けザクセンのケムニッツ管区ゲマインデ・ヴィットゲンスドルフ Gemeinde Wittgensdorf/Chemnitz in Sachsen 発行の額面50プフェニヒのゲートシャイン。券面上部左には「50プフェニヒ相当の証券」、左隅には「ケムニッツ管区ヴィットゲンスドルフ 1921年7月1日」とあり、その下部に署名がなされている。また右上部にも「ゲマインデ・ヴィットゲンスドルフ」とある。図柄について言えば、この共同体の緊急紙幣も黄金のろば²⁴⁾のモチーフを選んでいる。テイル・オイレンシュピーゲル²⁵⁾が跨るこの驢馬は、口とお尻から金貨ではなく新札 (ノートゲルト) をはき出しており、年寄りと若い女性がいささか当惑顔で、これを受けている (Schittny, p. 11)。



図版16-17 我々は離れない

図版16-17解説：1921年11月5日、ラインラントのプファッフェンドルフ-コブレンツ Pfaffendorf-Coblenz in Rheinland 発行の75プフェニヒのノートゲルトシャイン。券面の表面（図版16）には、この緊急紙幣が公告後3カ月で効力を失うとあり、ゲマインデ首長某の署名がある。裏面（図版17）にはライン川を挟んでコブレンツ市とプファッフェンドルフの街並みが地図上に示され、両側から右腕が伸びて川の上で握手を交わしている。「我々はかけがえのない同胞であり、いかなる緊急事態、危機にあっても分離はしない」とある (Coffing, p. 243)。第一次世界大戦後コブレンツには連合軍ラインラント高等弁務

官事務所がおかれ、アメリカ軍とフランス軍が一時的に占領していた。券面の図柄は、この米・仏軍による占領統治を反映してのもの。

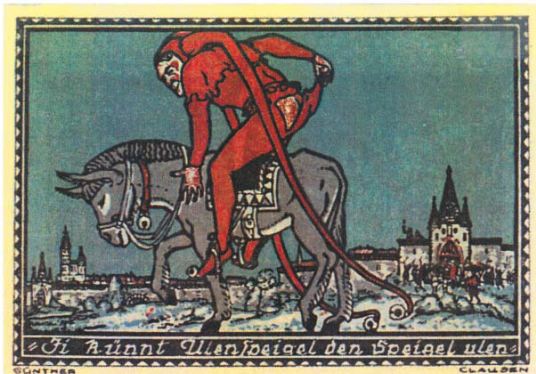


図版18 新札を食い糞をする驢馬

図版18解説：1921年11月10日付けヴェストファーレンのパーデルボルン Paderborn in Westfalen 市貯蓄金庫（シュパールカッセ）発行の額面2マルクの地域為替。

券面外枠内には左側面より「パーデルボルン市貯蓄金庫は、当行の資産からこの地域為替の持参者に支払う」とあり、同じく外枠下段には「公式な換金・回収通告後1ヶ月間有効」とある。券面内部については、右上に「市長某の署名」があり、中央下段には「我がパーデルボルン市民はドゥカーテン金貨²⁶⁾を放る驢馬を持ってはいないが、我が紙で作ったお金を購入する驢馬はこの世に居るものだ」とある。

絵柄について言えば、この驢馬は黄金の驢馬ではなく、単なる駄馬で、普通の糞をしている。「紙で作ったお金を買う驢馬」とは、言うまでもなく、ノートゲルトの蒐集家や一般の市民を指している。第一次世界大戦が終わってからも、多くの都市は、美しい絵柄のノートゲルトを発行し、そこからの収入によって、市の金庫を潤したとされる (Schittny, p. 9)。



図版19 汚れた尻を見せるティル

図版19解説：1921年、ブラウンシュヴァイク公国クナイトリンゲン Kneitlingen in Braunschweig 発行のノートゲルトには「オイレン・シュピーゲルは糞くらえと告げる」とある。券面にある文の解説をすれば、「オイレン・シュピーゲル」は低地ドイツ語で「ウーレン シュパイゲル」と発音し、これ“ulen den Spiegel”は「尻を拭く」とか「尻を洗う」という意味である。つまり、「オイレン・シュピーゲル」とは「お尻が清潔で綺麗な男」の意味になる。図版では、驢馬に跨ったティルが、ズボンの尻あてを剥いてお尻を見せている。この図は、糞で汚れた自分の尻を見せることによって、自分は「オイレン・シュピーゲル」＝「お尻が清潔で綺麗な男」ではないよ、と自分に差し向けられた追手に対して示しているのである。『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快なはずら』に収められている第66話のエンディングの場面を描いたものである。金貨を放ることはもちろん、糞さえ出さない驢馬に代わって、ティルは自分の糞まみれのお尻を見せている (Schittny, p.137)。描画はギュンター・クラウゼン Günter Clausen²⁷⁾。

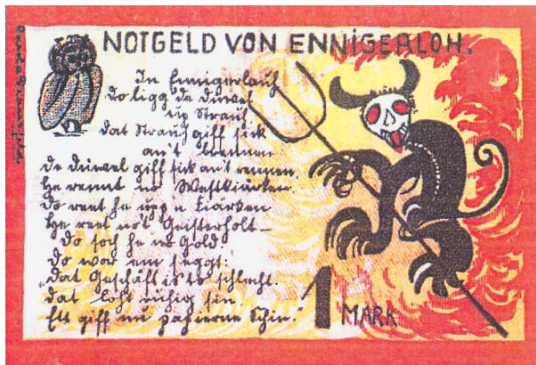
インフレーションに苦しむクナイトリンゲンの人々は、この紙幣を手にとってどんなメッセージを受け取ったことであろうか。クナイトリンゲンはティル生誕の地だけあって、この他にも『愉快なはずら』に収められている話を画題にした紙幣をシリーズで発行しており (Schittny, p.135-136)、ブラウンシュヴァイク市自体も第15話を画

題とした75プフェニヒ緊急紙幣を発行している (Schittny, p.137)。



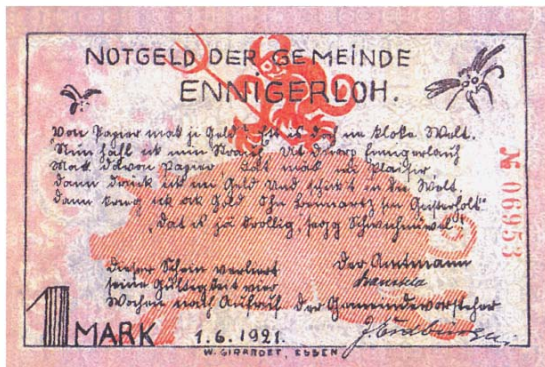
図版20 新札を啄ばみ金貨を放る鷲

図版20解説：1921年、チューリンゲンのアルンシュタット Arnstadt/Gera in Thüringen 発行のノートゲルト6枚セット (額面は10プフェニヒ) の1枚。アンドレアス・パウル・ヴェーバー Andreas Paul Weber²⁸⁾の描いた金貨を放る鷲。尻の穴から金貨を放るのは驢馬ばかりではない。風刺画家ヴェーバーの描いた券面は、ノートゲルトを啄ばむ鷲が、尻の穴から金貨を放る図柄である。券面の周囲には「すべての事態はかなり [重症] であるが、人々は [この労苦が] 報われんことを切に願っている。[この紙幣を] 現金化しなければ、上手くいくかもしれない」とあり、市の金庫を預かる役人が、ノートゲルトを啄ばむ鷲の尻から出てくる金貨を掌で受けており、その表情はご満悦である。鷲はドイツ国家のシンボルであり、さしずめノートゲルトを掴まされている国民が、結局のところ国家や地方公共団体に己の財貨を委ねていることを、皮肉をこめて描いている (Schittny, p.130)。裏面には「換金・回収公告後1か月間有効」とあり右下に「市参事会員の自署」がある。



図版21-24解説：1921年6月1日、ヴェストファーレンのエンニガーロー Ennigerloh in Westfalen 発行の1マルク紙幣。

図版21：「エンニガーローでは悪魔が麦藁の上に座っている。麦藁が燃え始め、悪魔は逃げ始める。悪魔はヴェストキルヘンに向かいフィルケンに逃れた。さらに霊木の森に逃げ込み、そこで金を探すが、[梟のような姿の] 霊木が、いまは紙で作ったシャインしかないから、金探しの仕事は不向きにすぎるので、やめておけと言う」



図版22：「紙から貨幣を作るだって？おかしな世の中だぜ。だったら俺はエンニガーロー村から麦藁を取り寄せ、それから紙を作ろう、楽しみなこって。それから俺さまの紙幣を印刷して世の中に送り出す。さすれば俺にだって金を作り出せる。ブレンアルツの霊木、お前の言うことは可笑いぜ、と悪魔は言う」

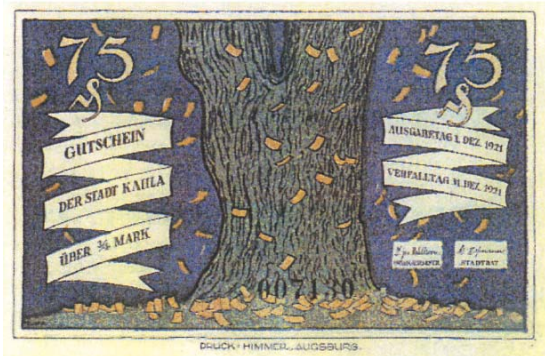


図版23：50プフェニヒ紙幣。第一次世界大戦中の危機とこれと結びついた食糧危機の様子を、エンニガーローのシャインは券面に描いている。テーブルについている6人の男性は、煙草を吸ったり新聞を読んだりしている。上辺に描かれている蕪6つは、この6人の男性にちょうど割り当てられる。右下のマーマレードは3缶で、これは半分ずつしてもらわなければならないが、この2品目だけはなんとか配給するだけの分量があった (Schittny, p. 29)。前出本文「蕪の冬」を想起せよ。



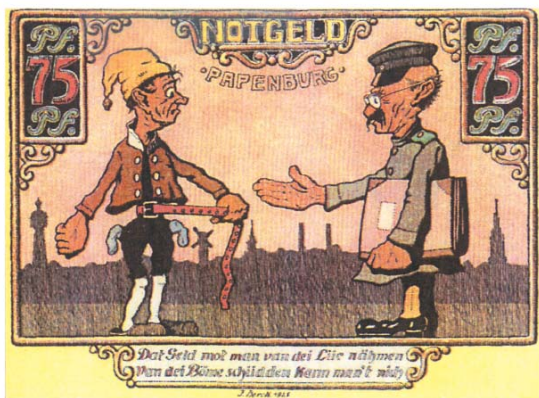
図版24：券面上部中央にエンニガーローの紋章、その下部には「もし私が小鳥なら、緊急紙幣を啜って世界各地を飛び回り、金貨と替えてくるのに」 (Schittny, p. 30) とある。右上に悪魔、左下に楽器を演奏する少年、右下にそのメロディーに合わせるかのように囀る小鳥が描かれている。『グリム童話集』に「ねずの木」というメルヘン²⁹⁾が収められている。主人公の少年が小鳥に姿を変えて家を出て、各地をさ迷いながら美しい声で歌い、金細工師のもとで修業を積み、金の首飾りを貰って帰宅する。その情景を髣髴とさせるような絵である。描画は Doomfeld, C.

図版21-24 もし私が鳥ならば



図版25 ブナの木から新札が

図版25解説：図版1と同様で、1921年初頭、チューリングゲンのカーラ Kahla in Thüringen で発行された額面75プフェニヒの緊急紙幣。オラフ・グルブランソン Olaf Gulbransson³⁰⁾ 描画。券面中央には巨大なブナの木があり、中空から落ち葉ならぬ新札が舞い落ちている。左側の文言は「カーラ市の4分の3マルク緊急紙幣」とあり、右側には「発行日1921年12月1日、失効日12月31日」とあり、首長らの署名がみえる (Schittny, p.67)。落葉樹の枯れ葉は落ちるものの、根の周りの落ち葉は新芽が吹くための堆肥にもなる。ノートゲルトは落ち葉のようなもの、購入して新生ドイツの新たな息吹としてほしいという願いが込められているのであろう。



図版26 金は人から徴収するしか方法がない

図版26解説：1921年、ハノーファーのパーペンブルク Papenburg in Hannover 発行の75プフェ

ニヒ緊急紙幣。「樹をゆすっても金は取れないもんで、人から徴収せざるを得ない、と徴税吏は言う」とあり、左側に立つ市民はといえば、ズボンのポケットには何も入っていないばかりか、腹をすかせてベルトが目一杯余っている。それでも徴税吏は、左手に徴税簿と覚しき書類の束を持ち、大きな右手を差し出して納税を迫っている。徴税吏の服装はどこか軍服に似た、戦時の国民服を思わせる (描画は Berck, J.)。戦時中のドイツでは、国民は「バンドをきつく締め直さなければならない」と繰り返し呼びかけられていた。結局のところ、国家がある限りすべての負担は国民に掛かってくるという永遠の真実を、この券面の文言は物語っているのである (Schittny, p.30)。



図版27-28 団結は力なり

図版27-28解説：図版1および25と同様で、1921年初頭、チューリングゲンのカーラ Kahla in Thüringen で発行された額面75プフェニヒの緊急紙幣の裏面二種。オラフ・グルブランソン描画。開戦時の一致団結は雲散霧消して、第一次世界大戦後のドイツ国内は、あらゆる階層の人々が

互いにいがみ合うという、混迷の度を深めていた (Schittny, p. 67)。右端の農夫は堆肥用フォークを警察官の尻に突き刺し、鉄ヘルメットを目深に被ったその警察官は中央の傘を持つ男の左手を捉まえサーベルを振りあげている。警察官は傘を持った男の右手には手錠をかけたが、抵抗されている。左端の麦藁帽子の男は、ヒールの高い靴をはいたパンタロン姿の女性を裏返しに引き倒している。肥満した雇用主と思しき男性が中央下段のうつ伏せの女性に押し掛かっており、女性は左手に赤ん坊をあやすガラガラのようなものを持っている。左下隅の右手に禿げあがった頭の男が爪を立てており、端の人物は目を剥いて頭を掻き篦り、どっと涙を流して悲鳴をあげている。右隅にはユダヤ人と思しきメガネをかけた人物が這い蹲っているが、その右手の拳は力なく警察官に向けられている。図版28の絵には「強いビールが団結を作る」との文言が付されている。そこでは上記の登場人物ら全員がビールのジョッキを高々と掲げている。戦争が終わったドイツでは、あらゆる場面で対立が深まり、ドイツは迷走を続ける。



図版29 傷痍軍人のためにドイツ盲導犬を

図版29解説：1921年にオルデンブルク Oldenburg/Olden で発行された額面50プフェニヒのノートゲルト。Stalling, G. 描画。世界大戦で視力を失って帰還した元兵士にとって、盲導犬はなくてはならない忠実なヘルパーである。券面の中央に赤十字のマークを首に付けた姿、左右に2つ、裏にも1つ、主人に仕える盲導犬が描かれて

いる。券面の下部には細かい文字で「このシャインの発行はブレーメン市参事会警察委員会によって認可された。当シャインは商業銀行および民間銀行のオルデンブルク支店においていつでも [ライヒスマルクに] 換金されるとともに、ブレーメン新聞になされる換金・回収期日 [公告] 後3か月を経過した場合、効力は失われる。ドイツ救助犬協会」とある。盲導犬育成のための基金を募る目的を感じさせるもので、小額紙幣の不足を補う緊急通貨本来の目的からはずれてしまっている。

まとめに代えて

ドイツのノートゲルトは、発行された時代の状況と紙幣の形状、果たした機能等の観点から、大凡3つの時期、カテゴリーに分類される。第一次世界大戦の勃発前後から発行の始まる第1期のノートゲルトは、市場における小額通貨の絶対的不足という実需に迫られて印刷・発行され、実際に流通した小額紙幣。第2期では、鉄製のコインや小額紙幣の発行によって不足は解消されたものの、地域によってはなお小額通貨の量的不足がみられ、ライヒスバンクへの預け金を条件にノートゲルトの発行が許された。これに便乗する形で、多種多量の彩色の施された小額紙幣が蒐集家向けに発行された。戦後の混乱期と重なる第3期に発行されたノートゲルトは、インフレーションの進行に追いつかないライヒスマルク紙幣の印刷と配送の空隙を埋めるものであった。ライヒスバンクの額面保証がついたものが多いなか、不法なノートゲルトも相当額市中に出回った。

ノートゲルトは国家が発行した通貨ではなかったし、使用範囲が特定地域に限定されていた点や、通用期間が短期間に制限されていた点からしても、「国の通貨 staatliches Geld」とは次元を異にするものであった。それにも拘らずノートゲルトは、必要とされる流通貨幣総量を国家が供給できない場合に、それを補完するものとして発行されてきた。国法上、ライヒスバンクへの預け金に応じて発行が許されるものとされたが、法的な根拠を欠いたまま発行された第1期のノートゲル

トや第2期以降の不法に発行されたノートゲルトも多々存在した。

鑄貨に代わる緊急通貨（ノートゲルト）は戦時体制そのものを象徴するとともに、戦時市民生活の具体相を物語る貴重な資料でもある。このノートゲルトと、戦後のハイパーインフレーションを体現する超高額紙幣（パピアマルク）とレンテンマルク暫定紙幣、いずれも紙で作られたおもちゃのような紙幣であるが、平時の経済が破綻した時に登場し、一定の役割を果たし終えた点でそれらは通底していた。

ドイツ帝国が強行した第一次世界大戦と戦時インフレーション、その後のハイパーインフレーションは、給与所得者や退職年金生活者・国債保有者・利子収入で生活していた中小の市民階級を壊滅させた。この中産階級の消滅によって、左右の政治勢力の対立は尖鋭化し、全体主義へと向かったことは、すでに周知に事実である。戦争とインフレーションによって巨額の利得を得たのは、長期の債務契約を結んだすべての関係者＝連邦政府・各州政府・市町村・企業だけであった（リタ・タルマン、p. 53f.）。

本稿では、ノートゲルトについての初歩的な考察がなされた。ノートゲルトに描かれた絵画のなかには、時代や社会の実相を伝え、国民の心情を表出したものが見られた。第2期から第3期のノートゲルトを買い求めたのは、もっぱら蒐集家たちであったと言われるが、決してそれだけではなかった。善意の国民大衆もまた、ノートゲルトの購入をとおして、なけなしの金を国家・社会のためにはたいたのであった。ノートゲルトの券面には、ときとして、国民の愛国心や郷土愛に訴え、国家や地方の財政危機を救うことが求められ、あるいは戦傷者への同情と募金が求められていたからである。券面に描かれた絵画を通して、戦中・戦後のドイツ国民の苦渋・悲哀を幾ばくかは読みとれたと考えるが、いかがであろうか。

参考文献リスト

- 秋元英一（2009）『世界大恐慌』講談社学術文庫
阿部謹也（1978）『中世を旅する人びと—ヨーロッパ庶民生活点描—』平凡社、p. 200-251
「ティル・オイレンシュピーゲル」
阿部謹也訳（1990）『ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら』岩波文庫
ヴォルフガング・イエーガー、クリスティーネ・カイツ編著（中尾光延監訳、小倉正宏・永末和子訳）（2006）『ドイツの歴史 現代史—ドイツ高校歴史教科書—』明石書店
乾侑美子訳（2000）『1812年版グリム童話 上』小学館文庫、「テーブルよ食事の支度と金のろぼと袋の中の棒の話」p. 203-217
金田鬼一訳（1990）『完訳 グリム童話集 1』岩波文庫、KHM36「おぜんや御飯のしたくと金貨をうむ驢馬と棍棒ふくろからでろ」p. 350-374
河邑厚徳+グループ現代（2000 [2011年版]）『エンデの遺言—根源からお金を問うこと—』NHK出版
木村靖二・柴宜弘・長沼秀世（1997）『世界の歴史 26 世界大戦と現代文化の開幕』中央公論社
木村靖二編（2001）『新版世界各国史 13 ドイツ史』山川出版
坂井榮八郎（2003）『ドイツ史10講』岩波新書
ヒャルマール・シャハト（越智道順訳）（1935）『戦時経済とインフレーション—ドイツ・マルクの混乱より安定まで—』叢文閣（原著は Schacht, Hjalmar, Die Stabilisierung der Mark, 1927）
リタ・タルマン（長谷川公昭訳）（2003）『ヴァイマル共和国』白水社
ドイツ＝ブンデスバンク編（呉文二・由良玄太郎監訳）（1984）『ドイツの通貨と経済 上』東洋経済新報社
成瀬治・黒川康・伊藤孝之（1987）『世界現代史 20 ドイツ現代史』山川出版社

- ハインツ・ハラー「インフレーション過程に対する国家財政の役割」『ドイツの通貨と経済上』所収、p.143-190
- アダム・ファーガソン（黒輪篤嗣・桐谷知未訳）（2011）『ハイパーインフレーションの悪夢』新潮社
- 藤代幸一訳（1979）『ティル・オイレンシュペーゲルの愉快ないたずら』法政大学出版会
- 藤原辰史（2010）『カブラの冬—第一次世界大戦期のドイツの飢饉と民衆—』人文書院
- オットー・プフライデラー「大インフレーション期におけるライヒスバンク、マルクの安定化と資産再評価」『ドイツの通貨と経済上』所収、p.191-244
- 三宅立（1970）「第一次世界大戦とドイツ」『岩波講座 世界歴史 現代1』所収、岩波書店、pp.97-141
- 三宅立（2004）「第一次世界大戦の図像学」『ヨーロッパ 生と死の図像学』所収、東洋書林、pp.497-603
- 三宅立（2005）「第七章 第一次世界大戦とドイツ社会」若尾祐司・井上茂子編著『近代ドイツの歴史』所収、ミネルヴァ書房
- 村瀬興雄（1962）『ドイツ現代史増補版』東大出版会
- 森義信（2006）『メルヘンの社会情報学』近代文藝社
- Coffing, Courtney L. (1980/83) A Guide and Checklist. World Notgeld 1914-1947 and other Local Issue Emergency Money. 2nd Edition
- Elster, K. (1928) Von der Mark zur Reichsmark. Die Geschichte der deutschen Wahrung in den Jahren 1914 bis 1924, Jena, §28, S. 200 ff.
- Geiger, Anton (2003) Deutsches Notgeld. Bd. 3, Das deutsches Grossgeld 1918-1921. 2. Aufl.
- Grabowski, Hans-Ludwig; Mehl, Manfred (2009) Deutsches Notgeld. Bd. 1-2, Deutsches Serienscheine. 3. Aufl.
- Grabowski, H.-L. (2004) Deutsches Notgeld. Bd. 5-6, Deutsche Kleingeldschein. Amtliche Verkehrsausgaben. 1916-1922.
- Grabowski, H.-L. (2005) Deutsches Notgeld. Bd. 9, Notgeld der besonderen Art. Geldschein aus Stoff, Leder und sonstigen ungewohnlichen Materialien
- Keller, Arnold (2004) Deutsches Notgeld. Bd. 7-8, Das Notgeld der Inflation 1923
- Müller, Manfred (2011) Deutsches Notgeld. Bd. 12: Das wertbestandige Notgeld der deutschen Inflation 1923/1924
- Schittny, Hans Richard (2005) Sagen, Marchen und Historisches im Spiegel des Kriegs-Notgeldes 1917 bis 1923. Books on Demand GmbH, Norderstedt

事典の類

Hrsg. v. Sellien, R. u. Sellien, H. (1975) Dr. Gablers Wirtschafts-Lexikon, 2Bd.

Hrsg. v. Albers, W. (1981-1988) Handworterbuch der Wirtschaftswissenschaft: zugleich Neuauflage des Handworterbuchs der Sozialwissenschaften/Stuttgart, Fischer, 10 Bde.

『エンカルタ総合大百科』（2004）Microsoft

『世界大百科事典』（2000）平凡社、小椋正立「戦時インフレーション」の項

『ブリタニカ国際大百科事典 2 小項目事典』（1991第2版改訂）

『歴史学事典 1 交換と消費』（1994）弘文堂、pp.754-756

- 1) 普仏戦争に勝利したドイツは、フランスから30億フランの賠償金を取得し、これを基礎として1871年と73年の「貨幣法」によって金本位制を導入した。1874年には各邦の紙幣回収を命じ、75年には「銀行法」を制定して、中央銀行の設立と銀行券発行の独占が企図された。銀行券は1マルク=1,395分の1ポンド

- の純金との兌換が保証された。1914年7月の大戦勃発後、中央銀行は金兌換を停止、8月の「戦争立法」によって国家主導の膨大な戦費調達システムが作り上げられた。将来に不安を感じた国民が紙幣を金に兌換し保蔵したため、ライヒスバンクの金残高が著減したことが、兌換停止の直接の原因である（ハラ、p.154）。1913年の通常会計=国家予算は35億2,000万マルクであり、他方、戦時公債は年2回で計9回発行され、総額で959億5,000万マルクであった。このため、通貨流通量は大战中に平時の5倍にも膨れ上がり、通貨インフレーションの原因となった。木村、1997, p.60, p.111注1など参照。
- 2) 小額鑄貨が当時のドイツ人の日常生活においていかに重要であったかは、たとえば1900年頃の労働者の平均時給が30プフェニヒ、鶏卵1個が2分の1プフェニヒ、1914年の時給は36プフェニヒ、1918年の時給が1.27マルク、1919年7月の日給に関するプロトコルにある、既婚者の日給は4.25マルク、21歳以下の独身者の日給は3.75マルク、という数字をみれば明らかである。Schittny, p.7. さらに、シットニーによれば、ヴェストファーレンのビーレフェルト市における1917年の物価の一例として、鶏卵が28プフェニヒ、馬鈴薯が17プフェニヒ、パンが25プフェニヒ（それぞれ1ポンド当たり）などの数値があげられている。Schittny, p.13.
 - 3) 戦争、内乱、恐慌、金銀価変動などに際して、金・銀の国外流出や退蔵などにより流通貨幣量が著しく欠乏した場合、その不足を補う目的で一時的に発行される代用貨幣。一定の限られた地域、限られた期間流通したのち正規の通貨との兌換が約束されている。第一次世界大戦中および戦後のドイツの緊急貨幣Notgeldはその一例。『ブリタニカ』p.427。ドイツの地方公共団体が発行した緊急通貨は、「ゲート、ゲートシャイン (Gutschein)、シャイン」とも称された。いずれも証書、証券、紙幣と訳しうるが、本文ではドイツ語表記のままとする場合が多い。
 - 4) 1871年に国家統一を成し遂げたドイツ帝国は、プロイセン王国を中心とする王国4、大公国6、公国5、その他の邦7、自由都市3、合計25の邦からなる連邦で、各邦は伝統的な政治・行政・法律や独自の貨幣を保持し続けた。1873年には帝国の通貨単位として「マルク」が設定され、76年には貨幣統一がなされた。1871年に鑄造が中止された北部・中部ドイツのターレル銀貨は、しかし、その後1908年まで法貨として流通した。帝国政府は、戦時中の法的根拠を欠いた小額紙幣の発行を規制しようとして法令を発しているが、成功していない。Schittny, p.7. なお、シャハトもノートゲルトの発行とその後の経過について、略述している。シャハト p.16-17.
 - 5) 鑄貨、革、絹、リネン、切手、アルミホイール、石炭、再生紙等の形で発行され流通した。詳細は、Grabowski, H.-L. (2005) Deutsches Notgeld. Bd. 9.
 - 6) 戦前のドイツは家畜飼料の3分の1を輸入に頼っていたが、開戦後入手できなくなると、豚の飼料に穀物や馬鈴薯を使用し始めた。人の口に入るべき食糧を確保するために、1915年春、政府は豚の飼料に穀物や馬鈴薯の使用を禁じた。このため、代用飼料のない農民は、飼育頭数の3分の1にあたる900万頭を処分した。このため一時的に豚肉は豊富に回収したが、その後豚肉・ソーセージは市場から姿を消したという。木村、1997, p.67.
 - 7) コールラビ Kohlrübe は飼料用の根菜類であり、もう一種類のスウェーデンラビ Steckrübe も決して旨いものではなかった。ドイツ人にとって、戦時中の1917年を象徴するものが「蕪」であった。このほかに食べるものがなかったのである。Schittny, p.12-13. 藤原辰史 (2010)。成瀬、1987, p.181には、1917年1月～3月分のエルフルト市民に配布された「蕪の配給券」の図版が掲示されている。また本稿図版8および23も参照のこと。
 - 8) 銅貨は1916年以降鑄造されず、その代わりに

- 1 プフェニヒと2 プフェニヒの紙幣が発行されたという。Coffing, p. 4.
- 9) ハラー、p. 164-166.
- 10) 価格インフレーションは戦争末期にかけて一段と強まっていった。ハラー、p. 159, 162.
- 11) 1914年に6,780万人の人口となっていたドイツ帝国は、第一次世界大戦によって177万から180万8,000人と推定される戦死者と、421万6,000人の負傷者をだした。その人口に占める割合は9%にもなる。アメリカ合衆国を含む参戦国全体では、戦死者は非戦闘員を含め1,900万人、負傷者は2,200万人を数えた(アメリカ陸軍省調べなどより)。
- 12) ファーガソン、p. 53f. には、オーストリア・クローネの暴落の中で、株価が青天井のように上がり続ける様子を、1919年12月15日のオーストリア婦人の日記の一文「私の買った工業株は、不可解なほど値上がりしている。不安を覚えるほどだ」を紹介しつつ、言及している。ドイツもまた同様の状況にあった。
- 13) 急激なマルク安を当て込んで、近隣諸国の住民は「外貨」持参でドイツ国内に買い物や食事にやってきて、高価な家財道具や骨董の価値の高い品物を買ひ漁り、豪勢な食事をして帰っていったという。ファーガソン p. 178 など。
- 14) 大戦後のドイツ、オーストリアは激しく荒々しいインフレーションに襲われ、そのあと、大規模な失業や倒産、貧困、自殺、犯罪などをもたらすデフレ危機が続いた(エンデの遺言、p. 101)。この時代に貨幣のありかたを根源的に問うた、ベルギー生まれのドイツの経済学者シルピオ・ゲゼル(1862-1930)は、「地域通貨」の理論と実践の先駆者となった。
- 15) 戦前1913年時点のドイツは、世界最大の商船隊(2,000隻、4,300万トン)を誇り、石炭生産量1億9,000万トン、銑鉄生産2,870万トンでヨーロッパ最多、工業製品の輸出ではイギリスと並び、輸出総額ではアメリカに次ぐ世界第2位であった。ヴェルサイユ条約でドイツが戦勝国に引き渡さなければならなかったものに、エルザス=ロートリンゲン、シュレージエン、シュレースヴィヒ北部といった工業部門や農業部門で資源豊かな地方の割譲が含まれていたことから、農業生産の10~15%、鉄鉱石の75%、鑄鉄の30%、鉄鋼および石炭の25%をそれぞれ失うこととなった。そのほか、輸送用の機関車5,000両、貨車15万両、トラック5,000台、商船隊の大部分、漁船の25%、石炭2,400万トンなどを引き渡すこととなった。リタ・タルマン、p. 47. 詳細は Elster, p. 118-130.
- 16) ハラー、p. 170-175.
- 17) 外国為替市場におけるマルクは、1922年の7月に1\$ = 493^{マルク}; 10月末に4,500^{マルク}; 1923年1月に1万7,972^{マルク}; 7月に35万3,410^{マルク}; 9月に9,886万0,000^{マルク}; 10月に252億6,020万8,000^{マルク}; 11月には4兆2,000億^{マルク}にまで下落した。リタ・タルマン、p. 49. プフライデラー、p. 209には、1913年から1923年までの「現金流通量・ドル相場・物価指数および代表的賃金・俸給」に関する付表がある。数値は月末ないしは月平均で出されており、タルマンのそれとは異なる。為替レートの急落に関してハラーは、政府が新たに課した高い税負担を逃れようとして、大規模な資本流出が起り、これがマルクの対外価値を低落させたとする。マルク安が国内物価を押し上げるという悪循環が繰り返されていく。ハラー、p. 180-182.
- 18) プフライデラー、p. 207-208. Elster, p. 201. 1922年7月17日付「ノートゲルトの発行と回収に関する法」
- 19) 第一次世界大戦終了時の物価水準は、各国とも戦前の2ないし4倍であったが、その後敗戦国のドイツ・マルクは、周知のように1兆倍強、ロシア・ルーブルは500億倍という平価の切り下げを経験している。第二次世界大戦後の日本でも、1934-36年の平均に較べて、消費者物価は1946年に50倍、49年には240倍に上昇している。小椋正立『世界大百科事

- 典』 p. 79
- 20) なお、割譲・被占領地域では1923年末のノートゲルトの総額は1垓8,000京マルクで正規流通紙幣総額の36.2%にも及んだ。Elster, p. 202.
- 21) Coffing, p. 4-5. ノートゲルトの蒐集家の推計では、ドイツではおよそ163,000種類の緊急紙幣が発行されたようであり、最大の蒐集家 Dr. Keller は109,800種を所持しているとされる。緊急通貨は一時的にせよ、たびたびかなりの規模で発行・回収されているが、初期の緊急通貨に関する統計が欠けているため、戦時インフレーションの分析にあたって一つの空隙が生じているという。プフライデラー, p. 208.
- 22) 賠償金額は開戦時ドイツの国家予算の37年分に相当し、戦前の金本位制下の金換算で4,730t 余りであった。ルール占領、ハイパーインフレーションとレンテンマルク紙幣の発行などにより、賠償については仕切り直しとなり、1924年のドーズ案、1929年のヤング案により、支払い条件の緩和や賠償額の減額がなされた。
- 23) グロッシュェンは前近代のドイツ、オーストリア、フランスで通用した通貨で主に銀貨。
- 24) 『グリム童話集』のメルヘン「おぜんや御飯のしたくと金貨をうむ驢馬と棍棒ふくろからでろ」の粗筋：あるところに、仕立屋とその3人の息子が暮らしていた。長男が修業先で技をマスターして独立する際に、親方から、どこでも平らなところにおいて「お膳や、ご飯の支度」と唱えれば、瞬く間に食事が並ぶ魔法のテーブルを饞別として貰い受けた。次男が修業先の親方から独立する際にも、呪文「ブリックレー・ブリット」を唱えると、口と肛門から金貨（ドゥカーテン金貨）を吐きだすロバを贈られた。次男は金に不自由する事がなくなり、財布にはいつも金貨がいっぱい入っていたので、どこへ行っても何でも一番高く一番上等なものを手に入れた。
- 最後に三男も職人として独立し、親方は護身用の、魔法で動く棍棒の入った袋を贈る。
- 三人の息子が持ち帰ったものをそれぞれ披露すると、父親は針と糸と物差しとアイロンを戸棚にしまいこみ、三人の息子と共に安穩に暮らした。食事の心配をしなくても良く、仕事をしなくても豊かに暮らしてゆけるだけの現金が手に入る、夢のような話が語られている。それは常に飢えと貧しさに悩まされてきた、前近代社会における庶民の夢のまた夢であったのであろう。なかでも金貨を放る驢馬こそ、全てのドイツ人が幼少のころに一度は夢見たものであったに違いない。
- 25) テイル・オイレンシュピーゲルは、ブラウンシュヴァイクの1335年、1337年、1355年のウアクンデ（証書）にその名が見出される実在の人物で、クナイトリンゲンの生まれで父母の名も判っている。テイルという農民の小倅が、ドイツの各地を旅して歩き、各地で貴族や聖職者、商人や職人を相手にいたずらをしては鬱憤を晴らすというもので、書物自体は15世紀後半に集大成されたもののようである。第66話では、笛作りのマイスターが、自分を虚仮にしたテイルに仕返しをしようとして人を差し向けたが、テイルは尻当てを剥がして汚い尻を出し、ここを見ろ、こんな汚い尻の男がテイルのはずはないと嘯き、差し向けられた人を追い返す場面である。
- 26) ドゥカーテン金貨とは、13世紀から19世紀までのヨーロッパ大陸に通用した純度の高い金貨のこと。独：Dukatén, 仏：ducat, ducaton.
- 27) 生没年は1885-1954年。24歳からブラウンシュヴァイクに居住し、ワンダーフォーゲル運動にかかわり、地元の新聞にも多数の絵画を掲載。1915-17年に地元の工芸学校の教諭。テイル・オイレンシュピーゲルを描いた絵画は代表作と言える。
- 28) 生没年は1893-1980。世界大戦勃発時、東部戦線の鉄道エンジニアとして勤務、その後製図工として軍のために働く。戦後、シニカルな絵を発表し、ナチスの台頭に脅威を感じつ

つ、これに抵抗する出版物の発行を手掛ける。ゲシュタポに逮捕されて強制収容所送りとなる。のち、非政治的な絵画活動を許され、優れたリトグラフの作品を残した。

29) 『グリム童話集』に収められている「ねずの

木」というメルヘンについては、拙著(2006)に詳しい。

30) 1873年現オスロ生まれ、1958年没、画家、素描家、戯画家。1929年以降はミュンヘン・アカデミーの教授。

An introductory remark of Emergency notes —Sorrow of the German people seen in paintings on the note—

YOSHINOBU MORI

Otsuma Women's University School of Information-Studies

Abstract

At the same time as the outbreak of World War I in 1914, various cities and local public bodies of the German Empire launched an issue of urgent notes. They tried to supplement the circulation-shortage of small coins with urgent notes. Though the issue of the notes lacked legal basis, it was one emergency measure for self-help,

Around 1917, iron coins began to appear on the market and the issue of urgent notes decreased. But the cities and local public bodies kept issuing the notes until the age of the hyperinflation in 1923–24.

The issuer in each city and local bodies took up, as the subjects of painting, familiar historical phenomenon, legend, fairy tale and hardships in wartime and painted them on the ticket side. These colorful and lovely notes invited collector's interest.

In the first half of this paper, the situation about the issue of urgent notes is described in age order according to the category. And in the latter half, from the painting drawn on the ticket side, I would like to decipher the sorrow of the Germans during 1914–1924.

Key Words (キーワード)

Currency in wartime (戦時通貨), Emergency money (Notgeld 緊急通貨), Inflation in wartime (戦時インフレーション), Large currency notes (高額緊急通貨), Metallic currency (小額鑄貨), Monetary crisis (通貨危機), Rentenmark (レンテンマルク), Small currency notes (小額緊急通貨), The Central Bank of German (Reichsbank ドイツ中央銀行), World War I (第一次世界大戦), The German Empire (ドイツ帝国)